

芥川龍之介 『羅生門』

1

ある日の暮れ方のことである。

一人の下人が、羅生門の門で雨やみを待っていた。

広い門の下には、男のほかに誰もいない。

ただ、所々、丹塗りの剝げた大きな田柱に、ギリギリすが、一匹とまっている。

羅生門が、朱雀大路にある以上は、男のほかに、雨やみを、市女笠や、搦

烏帽子が、もう三人は、ありそうなるものである。

それが、男のほかに、誰もいない。

なぜかとうとう、二三年、京都には、地震とか、辻風とか、火事とか、飢饉とか、い

災いが、続いて起った。

その洛中のさびれ方は、ひどくおどろきではない。

旧記によると、仏像や、仏具を、打ち砕いて、その丹が、ついたり、金銀の箔が、ついたり、した木を、道端に積み重ねて、薪の料に、売っていたと、いわれている。

洛中が、その始末で、あるから、羅生門の修理などは、もとより、誰も捨てて、顧みる者が、なかった。

すると、その荒れ果てたのき、狐狸が、棲む。

盗人が、棲む。

とうとう、しまには、引き取り手のない死人を、門へ、持ってきて、捨てていく、と

いう習慣が、あった。

その日、目の目が、見えなくなると、誰でも、気味を、悪がって、門の近所へ、足踏みを、しながら、なまってしまったのである。

そのかわり、また、からすが、そこから、たくさん、集まってきた。

昼間、見ると、そのからすが、何羽と、な、輪を描いて、高く、鷗尾の周りを、鳴きながら、飛び回っている。

ことごと、門の上の空が、夕焼けで、赤く、なると、それは、それが、いままで、な、は、つぎり、見えた。

からすは、もちろ、門の上にある、死人の、肉を、つらばみに、来るのである。

もともと、今日は、刻限が、遅い、羽も、見えな。

ただ、所々、崩れがあった、そうして、その崩れ目に、長草の生えた、石段の上に、からすの糞が、点々と、白へ、びりびり、つらつら、見える。

下人は、七段ある、石段の、ちまた、上の段に、洗ぎ、らした、紺の襦の、尻を、据えて、右の頬に、できた、大きな、きびを、気にしながら、ぼんやり、雨の降るのを、眺めていた。

雨は、羅生門を、包んで、遠くから、あつと、音を、集めて、へ。

夕間は、ただ、空を、低くして、見上げると、門の屋根が、斜めに、突き出した、葺の先に、重たく、薄暗い、雲を、支えて、へ。

どうも、なら、な、か、する、ため、には、手段を、選んで、な、は、な。

選んで、は、築土の、下か、道端の、土の上か、飢え死を、する、は、か、ある。

そうして、門の上、持つて、犬の、を、捨て、ら、は、か、ある。

選ば、と、す、は、——、下人の、考え、は、何、度、も、回、低、回、した、ま、は、か、や、い、

この、同所へ、逢着した。

文
ボジネガ値
下人の正義感

【メモ】

【散布図】

芥川龍之介 『羅生門』

2

しかしこの「すれば」は「いつまで」であっても、「結局すれば」であった。

下人は「手段を」選ばな「どう」ことを「肯定しながらも、この「すれば」のかたをつけるために、当然、そのあとに「来るべき」盗人に「なるより」ほかに「しかたがな」。」「どう」ことを、積極的に「肯定する」だけの、「勇気が出すに」いた「ので」ある。

下人は「大きな」くきめを「して、それから、大儀そうに」立ち上がった。

夕冷えの「する」京都は、「もう」火桶が「欲しい」ほどの寒さで「ある」。

風は門の「柱と柱との」間を、「夕闇と」ともに「遠慮なく、」吹き抜ける。

丹塗りの「柱に」どまって「いた」きりぎりすも、「もう」どこか「行って」しまった。

下人は「首を」縮めながら、「山吹の」汗衫に「重ねた、紺の」襖の「肩を」高くして、「門の」周りを「見回した」。

雨風の「憂えの」ない、「人目にかかる」恐れのない、「一晩」寒に「寝られそう」な所が「あれば、その」で「ともかくも、夜を」明かそう「と思った」から「で」ある。

すると、「幸」門の上の「楼へ」上る「幅の」広い「これも」丹を「塗った」はじ「が」目「についた」。

上なら、「人が」たに「しても、どうせ」死人「ばかりで」ある。

下人は「そこで、腰に」さげた「聖柄の」太刀が「鞘走らな」ように「気を」つけながら、「わら草履を履いた」足を、「その」はじ「の」ちばん「下の」段へ「踏みかけた」。

それから、「何分かの」ちで「ある」。

羅生門の「楼の上へ」出る「幅の」広い「はじ」の「中段に、一人の」男が「猫の」ように「身を」縮めて、「息を」殺しながら、「上」の様子を「うかがって」いた。

楼の「上から」差す「火の」光が、「かすかに、その」男の「右の」頬を「ぬらして」いた。

短い「ひげ」の中に、「赤く」うみを「持った」にきびの「ある」頬「で」ある。

下人は「初めから、この」上「に」いる「者は、死人」ばかりだと「たかを」くく「って」いた。

それが、「はじ」を「二三段」上「つて」みると、「上」では「誰か」火を「とぼけて、しかも」その「火を」その「こと」で「動かして」いる「ら」して「い」。

これは、その「濁った、黄色い」光が、「隔々に」くもの「巢を」かけた「天井裏に、揺れながら」映ったので、「すべて」に「それと」知れた「ので」ある。

この「雨の」夜に、この「羅生門の」上で「火を」ともして「いる」からは、「どうせ」ただの「者では」な「い」。

下人は、「やもりの」ように「足音を」盗んで、「やっと」急な「はじ」を、「いちばん」上「の」段まで「這う」ようにして「上りつめた」。

そうして「体を」できる「だけ、平らに」しながら、「首を」できる「だけ、前へ」出して、「恐る恐る」楼の「内を」のぞいて「みた」。

見ると、「楼の内には、うわき」に「聞いた」とおり、「いくつ」かの「死骸が、無造作に」捨てて「あるが、火の」光の「及び」範囲が、「思った」より「狭い」ので、「数は」いくつ「とも」わから「ない」。

ただ、「おぼろげながら、知れるのは、その」中に「裸の」死骸と、「着物を」着た「死骸と」がある「と」いう「ところ」がある。

もちろん、「中には」女も「男も」まじって「いる」ら「い」。

そうして「その」死骸は「みな、それが」か「つて、生きて」いた「人間だと、いう」事実「さえ疑われるほど、土を」こねて「造った」人形の「ように、口を」開いたり「手を」伸ばしたり「して、うわき」床の「上」に「転がって」いた。

しかも、「肩とか」胸とかの「高く」な「つて」いる「部分に、ぼんやりした」火の「光を」受けて、「低く」な「つて」いる「部分の」影を「うつそう」暗く「しながら、永久に」おしの「いで」く「黙って」いた。

文

ポジネガ値

下人の正義感

【メモ】

【散布図】

